

経済的側面から見た朝鮮通信使

徐 賢 燮

A Study on Chosun Tongsinsa Viewed Economic Aspects

Hyun-seop SEO

Abstract

This paper focuses on the commercial relations between Chosun and Japan during the 17th-19th century. In particular, this paper focuses on the twelve diplomatic and cultural delegations, the so-called " Chosun Tongsinsa " which the Chosun dynasty, at the request of the Japanese shogunal, dispatched to the Tokugawa bakufu during the period from 1607 to 1811.

During the period, most of the trade activities between Chosun and Japan occurred through Tsushima, an island located between the Korean peninsula and Kyusyu. The major goods offered by Japan were minerals including silver and copper, water buffalo's horns and pepper, while those offered by Chosun were rice, beans and cotton, Korean ginseng and Chinese silk fabric.

The author draws particular attention to the fact that on several occasions, large sums of silver coins given to chief envoy and other high ranking officers of the above Chosun delegations in the form of gift-exchanges. Onward from the end of the 17th century, the amount of Japanese silver which flowed to Chosun exceeded that which flowed to all other countries combined. Chosun, in return, used this silver as a means of payment for its commercial dealings with China. This distribution channel of silver-i.e., from Japan to China by ways of Chosun was sometimes referred to as the " silver-road " in the East Asia.

This paper also deals with records of the Chosun envoy's observations of Japan, comparing them with records of the periodical courtesy calls more to the Japanese shogun by the chief of the Dutch trading post in Dejima, Nagasaki.

During the period known as Sakoku or " closed country ", Holland was exceptionally given permission to keep a trading post in Dejima from 1639 to 1854. In appreciation of this special treatment, and in order to continue to trading, the chief of trading post would frequently travel in entourage to Edo to appear before the Shogun and present him with gifts. This audience was conducted a total of 166 times.

It should be noted that while the leadership of Tokugawa bakufu showed a keen interest in receiving the Dutch entourage, which brought medical instruments, optical instru-

ments and rarities from Europe as well as information and reports on international situations, and they showed rather less interest in the Chosun missions, which mostly presented them with ginseng.

This paper in conclusion shows that the officials of the Chosun missions, by using Japan's level of Chinese culture such as Chinese poetry, Chinese calligraphy and Confucian ethics, perceived the Japanese as savage barbarians and collectively failed to appreciate the diversity and strengths of Japan.

Keywords: Tongsinsa, silver road, Dutch trading post, Dejima, Chinese culture

1. はじめに
2. 朝鮮と日本の対外交易
 - (1) 燕行使
 - (2) 日本の対オランダ交易
 - (3) 日本の対中国交易
3. 朝鮮と日本の貨幣経済
 - (1) 朝鮮の貨幣経済
 - (2) 日本の貨幣経済
 - (3) 高麗人參と通信使
4. シルバーロード
 - (1) 豊臣秀吉と通信使
 - (2) 徳川家康と通信使
 - (3) 徳川秀忠と通信使
 - (4) 徳川家光と通信使
5. 結び

1. はじめに

通信使は、朝鮮の国王が日本の外交権者に国書を手交するために派遣した使節である。使節は「回答兼刷還使」、「朝鮮来聘使」、「朝鮮通信使」等と呼ばれていたが、本稿では一括して「通信使」としている。

1404年に足利義満が「日本国王」として朝鮮と対等の外交(交隣)関係を開いてから明治維新にいたるまで、両国は基本的にはその関係を維持した。通信使の使節・随員は使行中の体験と見聞を記した使行録を著したが、仲尾宏教授の調査によると現在およそ40種の使行録が伝えられている。

使節すなわち外交官は国の耳と目として、派遣された国について幅広く情報収集をするのは当然のことであるが、特に通信使派遣の目的が「倭情探索」となっていたことから、使行録には当時の日本の政治、社会、経済、文化等に関する情報は欠かせないものであった。

本稿は、40種に達する使行録のすべてを検証したものではない。ただ韓国語や日本語で編著された使行録に関する幾冊かの書物を検討したものにすぎないことをお断りする次第である。

通信使を論じる場合、当時の朝鮮と日本をめぐる国際的状況と朝鮮と日本の対外関係、とりわけ中国との関係を考慮して総合的に分析しなければ、全体像が見えてこないと思われる。通信使訪日の時代は、朝鮮が清国に燕行使を派遣し、長崎オランダ商館長が江戸参府を繰り返した時期と重なるため、これら通信使・燕行使・オランダ商館長江戸参府と日本と中国との交易を複合的にみる研究が求められよう。

2. 朝鮮と日本の対外交易

(1) 燕行使

燕行使は、朝鮮が清の北京に派遣した国家使節であり、丙子胡乱で朝鮮が清に降服した1637年から1894年甲午改革まで約250年続き、その回数は500回以上に及んだ。朝鮮は日本に通信使を送る際には同時に燕行使も派遣して3国の国際交流を結び、日本には清国の情報を知らせ、清国には日本の動向を伝えた。

ちなみに、清から朝鮮に派遣された使節は勅使と呼ぶが、その派遣は1644年以来151回、延人員351人になる。清の勅使の構成を、明から朝鮮への勅使のそれと比較してみると以下のような違いがあった。

清：原則的に高級官員(1品～3品)を選抜。漢族の官吏を排除し、満州族から人選。

明：下級官員または宦官

清は琉球や越南へも勅使を送ったが、その官職は5品以下の下級官吏で満洲族、漢族を差別していなかった⁽¹⁾。

燕行使は、儀礼的な目的のほか、経済的には使節の往復に伴って貿易が行われ、文化的には清の先進文化に朝鮮の知識人が直接触れることができるという意味があった。洪大容、朴趾源(旅行記『熱河日記』を著した)、朴齊家といった著名な実学者は、燕行使に随行して清の学者と交流した体験から北学論を唱え、朝鮮の実学の展開に大きく寄与した。

(2) 日本の対オランダ交易

1600年のオランダ船リーフデ号の漂着を契機に、日本とオランダの貿易が始まった。オランダはポルトガルの独占、イギリスの進出を排除して、1609年東インド会社の日本支店として平戸にオランダ商館を設置した。オランダ商館は1641年に長崎への移転を命ぜられて出島に移り、幕末まで出島にあって鎖国後の日欧間の貿易を独占した。日本からの輸出品は金・銀・銅・しょう脳・漆器など、輸入品は生糸・絹織物・綿糸・砂糖・薬品などである。

出島は幕末までにのべ700余隻のオランダ船の入港を見た。オランダ商館長は定期的に江戸に上り、将軍に拝謁して貿易許可の礼を述べて献上品を捧げた。これを江戸参府と呼んでいる。当初は毎年行われたが1790年からは4年に1回に改められた。オランダ商館長の江戸参府は1609年に始まり、1850年までに116回に及ぶ⁽²⁾。

商館長をはじめとするオランダ人のほか、通詞や警備などの日本人の役人、人夫ら大勢が同行し、江戸滞在に2～3週間、旅程全体では90日ほどを要する大旅行であった。オランダ商館長やヨーロッパ人医師らがもたらした科学や医学の進んだ知識が日本人に与えた影響は非常に大きい。彼らが持っていた知識は当時日本に伝えられた最先端のものであり、江戸参府旅行こそがその最先端の情報の発信源であった。

また、商館長は江戸参府の際、将軍をはじめ幕府高官に対して贈物を献上するのが恒例であった。日本側の資料にみえるところでは、将軍ならびに将軍世子に対する贈物を「献上物」と呼び、

幕府高官に対する贈物を「進物」と呼び分けている。献上品リストの中には望遠鏡、大砲、眼鏡など当時の日本には貴重で珍しかった様々なものが見られる。特に眼鏡が多く求められていたようだ。1633年9月にオランダ商館長クーケパケル(Nicolaes Couckebacker)が江戸へ持参した献上品の中には、望遠鏡1本、大砲4門、火薬12瓶などが含まれていた⁽³⁾。また、1668年4月25日付の日記では商館長は年配の老中のため1年で300個の眼鏡を希望すると記している。

1634年の春に望遠鏡とともに献じられた大砲4台、要塞に関する書籍は望遠鏡の軍事的有用性を示唆するもので、老中たちもオランダの大砲や望遠鏡に興味を持つようになり、望遠鏡の軍事的価値に注目し始めた。島原の乱(1637～38)を鎮圧するにあたり、松平信綱は東インド会社に援助を求めて2隻の船が天草へ派遣されたが、おそらくカピタンの望遠鏡で原城の様子をうかがったのであろう。1640年にも將軍への献上品として再度望遠鏡が要求されている。

江戸時代に日本に来航したオランダ船の数は、1621年から1847年までの227年間に延べ700隻以上にのぼる。江戸幕府はオランダから毎年もたらされるオランダ風説書によって国際情勢を知り、対外政策を決定した。また、ヨーロッパから伝来した学問・技術に関する研究は、そのほとんどがオランダおよびオランダ語の書籍を通じて摂取されたため蘭学と呼ばれ、幕末から明治維新以降に始まる急激な知的開国の下地を形成した。

(3) 日本の対中国交易

壬辰・丁酉倭乱(文禄・慶長の役)の後、中国民間商船の日本への渡航は10年余り途絶していたが、1610年に初めて来航した船主・周性如らは、家康から朱印状を受けられ、日本の各地で自由に貿易することを許された。1611～1635年、日本の鎖国政策が強固なものとなる前に日本に来航した中国貿易船(唐船)は450艘余り、平均して年40艘以上になるということである。1635年に、鎖国令が公布された後は、唐船の中国貿易は長崎に限られるようになった。

中国の貿易船が長崎に入港すると、船長には海外情報の提出が公式に求められた。この中国船からの情報は一般に『唐船風説書』と呼ばれている。こうして収集された2,200余件に達する情報は、江戸の大学頭・林家によってのちに『華夷変態』の名で編集され、さらに続編である『崎港商説』も刊行された。

中国商船によって輸入された品物は生糸、絹織物、薬材など多種にわたるが、その中には文献など大量の典籍も含まれていた。大庭脩氏によると、1714年から1855年の間に長崎を経て輸入された書籍の数量は、6,118種、合計5万7,240冊にも達する⁽⁴⁾。

このような日本の書籍輸入を朝鮮の知識人も注目していた。一例を挙げると、1764年の通信使の書記・元重挙(1719～1790)は、『和国志』で日本文化の状況について、文運の発展途上にあると、一応肯定的な評価を下している。その理由として元重挙は、文字生活の大衆性、通信使の往来、そして長崎を通じた書籍の流入を挙げている⁽⁵⁾。

3. 朝鮮と日本の貨幣経済

(1) 朝鮮の貨幣経済

15世紀の朝鮮では、交換経済の不振によって貨幣の流通も盛んではなかった。建国初期の1401年には楮貨(楮の樹皮を原料とする紙で作った紙幣)を発行して法貨とし、1423年には朝鮮通宝などの銅銭を鑄造して普及をはかったが、いずれも流通は一部にとどまり、一般社会の物品取引には米や布などが交換手段として使用された。

こうした状況は朝鮮後期に入って一変し、商品経済の発展に伴って貨幣の必要性が高まってくる。1633年と1651年に常平通宝という銅銭が鑄造され、その後貨幣の鑄造が中断した時期はあ

たが、1678年以降は恒常的に鑄造・発行されて全国に広まった。

朝鮮の対外貿易は厳しい国家の統制を受けていたが、中国とは朝貢貿易および使節の随行員による私貿易が、日本とは倭館貿易が行われていた。他方、江戸時代初期の1609年に朝鮮と対馬の間に結ばれた己酉約条による貿易が正常化すると、倭館を通じた対日貿易が盛んになった。朝鮮からは人参、米、木綿などを輸出するほか、清から輸入した物品の中継貿易を行なった。日本からは銀、銅、硫黄、胡椒などを輸入したが、銀を清へ再輸出することによって中間利益を得ていた。

このような国際貿易にあって最も重要な役割を果たしたのは、義州の湾商と開城の松商、そして東萊の萊商であった。対外貿易が活発になると、商人は莫大な富を蓄積した。しかし輸入品には贅沢品が多く、輸出品には銀と人参が大きい比重を占めたため、このような貿易は国家財政と民生にさまざまな問題をもたらすこととなった。

(2) 日本の貨幣経済

日本では、1167年に平清盛(1118~1181)が貴族政権を打倒し、武士として初めて太政大臣となって実権を握った。平清盛が宋から銅銭を輸入して通用させた結果、約470年間にわたって宋・元の銅銭が日本の貨幣として使われるようになった。日本において土地所有権を主張して貨幣経済を開拓したグループは武士階級であった。

1420年に公式使節として日本を訪問した宋希環(1376~1446)は、目にした光景から、日本では乞食さえ穀物ではなく銅銭を物乞いするほど商業と貨幣経済が社会全般に浸透していると衝撃を受けた。1428年に日本を訪問した通信使の朴瑞生も、日本の観察報告書の中で、千里の旅に出る旅人は米の代わりにお金を持っていれば宿泊の問題が解決され、現在のタクシーと言える馬までも借りることが出来るという事実を指摘して、日本の貨幣経済の発展に対する羨望を交えた驚きを記録している。

戦国末期に急速に開発された日本の金・銀の鉱山は、豊臣秀吉(1536~1598)の時代に最盛期を迎えていた。当時の日本は、メキシコに次いで世界第2の銀産出量があったといわれる。

江戸時代(1603~1867)以前は明との交易において、日本は銀に有利な銅との交換比率を利用して銀を支払いに用いて明銭(永楽通宝)などの銅貨を大量に輸入して流通させ、江戸幕府になると金貨・銀貨・銅銭の鑄造を行って貨幣経済をいっそう発達させた。

本格的な貨幣の鑄造は、江戸幕府開幕期の1601年、金貨の大判・小判・一分金に始まる。同時に銀貨の丁銀・豆板銀も発行された。金貨は定量貨幣であったが、銀貨は目方を量り、その重量によって交換価値を計算する秤量貨幣であった。幕府は1608年には永楽銭の使用を禁止し、翌1609年には金一両を銀五十匁(〔1688~1704〕以後は六十匁)、銭四貫文(四千文)の換算率を定めた。銅銭の発行は1636年であり寛永通宝と呼ばれる。1670年には、すべての渡来銭や模倣銭の使用を禁止して、貨幣の流通を寛永通宝のみとした。

日本は銀を海外貿易の決済手段として使用したため、朝鮮の倭館と日本の長崎での貿易を通じ、大量の銀が中国へ流れていった。

(3) 高麗人参と通信使

通信使時代、朝鮮側から日本の江戸幕府に対する礼物と交易品目は高麗人参、虎皮、絹布、木綿などであった。このうち高麗人参は朝鮮の特産物であり、王室への進上物や中国への貢納に欠かせないものであった。日朝貿易においても高麗人参は主力商品となり、ときには対外交易において銀貨の代用とされた。1609年、外交僧・玄蘇と員役などが高麗人参十三斤を求めていたとの記録があり、また1638年のある記録では、倭人たちが上等な高麗人参を求めて貿易していたという。高麗人参の需要は高く、1642年には高麗人参などの物品に対する貿易許可の要請があり、

1649年には対馬藩主が極上品人参百斤の購入を依頼している。1657年にも藩主が特上人参五十斤の貿易を要請し、次の年の1658年にも高麗人参の送付を依頼している。1678年には藩主及び江戸の諸執政所で使用する高麗人参八十斤の購入を求めたことが確認されている。

日本への高麗人参の供給も、その他諸国への供給同様に徹底した制限と統制の下にあった。公的に支給される高麗人参(公貿易)、倭館において厳格な監視の下に行われる私貿易による高麗人参、それら以外に日本側の求めに応じて不定期に輸出される高麗人参、この3つが合法的に供給される高麗人参のすべてであった。通信使が持参する高麗人参の量は二百～三百斤ほどが通例であった。

当時、高麗人参の値段は一斤(600g)で農家の出稼ぎの年収の10倍以上に相当するほどの高値であった。このことが、日本との高麗人参の貿易を通して商業的利益を追求しようとする一団の商人(私商・潜商)の登場に繋がる。1668年には100人余の朝鮮潜商が対馬を舞台とする高麗人参の密貿易で摘発されたこともあった。

私貿易であれ密貿易であれ、高麗人参の珍重と流行は日本経済の安定に対して多くの悪影響を及ぼした。高麗人参の対価として、朝鮮には年間50～70万両にも達する莫大な量の銀がもたらされた。17世紀末から18世紀初め、戸曹の年間予算が銀10万両に及ばなかったことを考えれば、この頃、朝鮮が高麗人参の貿易を通じて計り知れない利益を享受していたことが容易に想像されよう。

このように隆盛を極めた高麗人参貿易であったが、1730年代を境に衰退の兆しを見せ始め、18世紀半ばになるとほとんど途絶状態に至った。それは第一に天然資源である高麗人参の枯渇が大きな原因であったが、日本との高麗人参貿易の衰退には日本の国内事情もあった。品質は高麗人参と比較にはならないものの、享保年間(1716～1736)から清の高麗人参が日本に輸入され始める。延享年間(1744～1747)にいたると米国产の高麗人参まで輸入され始めた。明和年間(1744～1774)になると、幕府官営の御種人参(おたね人参)が多量に安価で販売される。17世紀初頭以後、100年以上にわたって盛んであった朝鮮と日本間の高麗人参交易だが、こうして18世紀半ば以後はほぼ廃れたと言ってよい状態になっていった。

4. シルバーロード (Silver Road)

(1) 豊臣秀吉と通信使

朝鮮は日本側の要請により1589年9月、通信使の派遣を決めた。翌1590年3月、通信正使・黄允吉、副使・金誠一、書状官・許箴らの一行は漢成を出発して7月に京都に到着した。しかし秀吉は外国の使節に対する礼をわきまえた様子がなく、すぐには通信使と会おうとしなかった。秀吉と通信使の会見が実現してようやく国書を手交することができたのは11月7日のことであった。壬辰倭乱の際、領議政、兵曹判書などを務めた柳成龍(1542～1607)の『懲愆録』によれば、秀吉は正使と副使とにそれぞれ銀四百両を与え、書状官と通事以下には身分に応じて差をつけた額の銀を与えたと記録されている⁽⁶⁾。銀400両とは現代ではどれくらいの額であろうか。1543年、種子島に漂着したポルトガル商人モッタとゼイモは種子島の島主に2挺の鉄砲を銀二百両で売ったとされ、二百両は現在の金額で約400万円であるという⁽⁷⁾。

物価の違いを考慮しても、秀吉が通信使正使・副使に与えた銀四百両とは現在でも数百万円の巨額にのぼるようだ。

秀吉が壬辰倭乱を引き起こしたのは、鉄砲伝来の50年後の1592年である。この50年間に、日本はすでに鉄砲を大量生産して戦争の意志を育てていた。当時、放たれた弾丸が数十匹の鳥の群れ

が飛び立つように発射されることから、朝鮮ではこれを「鳥銃」と呼んでいた。鉄砲の威力は当時の武器としては並外れていた。柳成龍は“鳥銃”の射撃距離と命中度は朝鮮弓とは比ぶるべくもなく、雷のように降り注ぐ弾丸の洗礼は避けることが難しい」と『懲毖録』に記している。朝鮮への鉄砲の渡来は壬辰倭乱勃発直前の1591年、黄允吉一行が日本を訪問した帰路、対馬島主・宗義智から3～4挺の鉄砲を贈られた。これが朝鮮に入り「鳥銃」と呼ばれるようになったのである。

しかし、当時の朝鮮の情勢認識は極めて不十分なもので、正使・黄允吉が「近いうちに必ず兵禍がもたらされるであろう」と宣祖に復命したのに対し、副使・金誠一は「日本にそうした兆しはない」という正反対の報告をしているほどで、「鳥銃」がもたらす深刻な意味を理解できるはずもなかった。

(2) 徳川家康と通信使

秀吉の朝鮮侵略(壬辰倭乱)によって両国の交わりは断絶したが、秀吉に代わって権力を掌握した徳川家康(在職1603～1605年)は、開放的な国際関係を摸索し、積極的に朝鮮との国交修復をはかった。徳川家康は朝鮮使節との会談の席上、自分は壬辰倭乱と無関係であることを力説して国交再開を求めた。

一方、朝鮮は壬辰倭乱により日本を不倶戴天の仇敵と見なしていたものの、明・清の交代など大きく動く東アジアの国際情勢の変動への対応を余儀なくされていた。

紆余曲折の末、戦乱の終息からわずか10年となる1607年5月に正使・呂祐吉、副使・慶暹、従事官・丁好寛ら一行の使節が来日することになった。

江戸城に一行を迎えた將軍徳川秀忠(在職1605～1623年)は破格と言えるほどの歓待ぶりを示した。使節を迎えて「感悦に堪えない」と述べ、饗宴ではみずから箸をとって料理をすすめ、喜びを素直に表した⁽⁸⁾。秀忠はこの信使の意味を十分に理解していたものと思われる。

江戸からの帰途、5月23日に通信使一行は駿府で家康と謁見し、家康から白銀三百枚、太刀三振などを贈られた。使臣から家康へは人参六十斤、白苧布三十枚、蜜百斤、蜜蝋百斤が贈られた⁽⁹⁾。

この時、使節に課されていた一つの重要な任務は日本の鉄砲の購入であった。ヌルハチの率いる建州女真が「後金」という国号を使い始めたのは1616年であるが、彼はすでに1583年頃から周辺の女真族を攻略し、5年後の1588年までに建州女真のほとんどを手中に収め、1589年にはみずから王と称して明と朝鮮を威嚇するほどの勢力に増大していた。朝鮮は戦乱を通じて日本の鉄砲の威力を思い知らされていたため、国家の最高政策決定機関である備辺司は、女真族の騎馬兵に対抗するには鉄砲にまさるものはないと判断し、使節に鉄砲購入の任務を与えたのである。

朝鮮使節は家康の特別なはからいにより、帰路に堺で鉄砲500挺と日本刀を購入することができた⁽¹⁰⁾。この家康の態度によって使節一行は日本による再度の侵略の危険はないと判断し、むしろ感謝の心を抱くことになったのである。

(3) 徳川秀忠と通信使

2回目の通信使は、家康の死没翌年の1617年、呉允謙を正使として訪日した。従事官・李景稷の『扶桑録』によると、朝鮮使節が京都を離れる前に、將軍徳川秀忠(在任1605～1623年)をはじめその弟2人、老中5人から礼物として莫大な銀貨が贈られた。まず將軍からは正使・副使・従事官の三使にそれぞれ銀貨五百枚、訳官ら2人にそれぞれ銀貨二百枚、随員31人に銀貨五百枚、その下の人員400人には銅銭千貫であった。秀忠の2人の弟は、三使に合わせて白金二百枚、5人の老中は三使に銀貨二百枚、訳官に五十枚を贈ってきた。三使に日本から贈られた銀千九百枚は、銀貨1枚は4両3銭ということから、額を計算してみると8,170両となる。小野武雄によると⁽¹¹⁾、1616年の銀54匁が金1両であるので、銀8,170両は金151両、江戸時代の金1両は約10万

円なので現在の金額に換算すると1,500万円を上回る額と推計される。

この巨額の銀に三使は当惑した。戦後の疲弊した経済など国の諸事情を勘案すれば、礼物として送られた銀は願ってもないものである。当時、朝鮮に派遣される明の使臣たちは朝鮮側に露骨に銀を要求した。1609年には六万両、1621年は八万両もの礼物が使臣に贈られたほどであった。

しかし、品位と体面を重んじる朝鮮の使節としては、教化の対象とみなしている日本から巨額の銀を受け取る大義名分がない。このような礼物を受け取って帰国すれば朝廷の弾劾が避けられない。結局、三使は悩んだ末に銀を含む幕府からの礼物を対馬に渡すよう決めたが、対馬は銀六千両余りを釜山の倭館に運び、朝廷側に受領を請うた。そこで国王・光海君により、銀を外国からの使臣に渡す「別人情」で使うか、宮殿造営の費用に充てるかのいずれかにすることが定められ、結局は光海君が幕府の礼物を受け取ったことになった。

(4) 徳川家光と通信使

將軍在任中の一代で朝鮮通信使を3度も迎えた徳川家光(在任1623~1651年)も、1624年に来日した第3回通信使の三使に銀貨五百枚ずつを、隠居の秀忠も二百枚ずつを贈ってきた⁽¹²⁾。三使は金品の礼物を固辞し、使節案内などに使うようにと対馬にこれを譲渡した。しかし一行が帰国した後、またも対馬島主は礼曹に銀四千五百十五兩などの將軍礼物を返してきた。

副使・姜弘重は『東槎録』のところで「日本は物資が豊かである」と驚きを綴り、「聞見総録」に「市場には物資が山のように積まれており、村里の間には穀物が広げられており、その百姓の富裕なこと、物資の豊富なことは、我が国とは比較にならない」と自国の状況を憂えている。そして、本来その帰還が使節派遣の目的でもあったはずの被慮人(朝鮮人の捕虜)の中にも、日本で財を成して帰国を願わない者もいると述べている。これは日本経済の優越性を率直に表現したものであった。

使行の各所において日本の豊かな経済は使臣を驚かせた。華麗な施設ともてなし、それに多くの贈り物は使臣等を喜ばせたが、同時に彼らを当惑させるものであった。日本の財力に使節は目を見張ったが、このような経済的な記録は断片的にすぎず、彼らが日本の経済力に対しての格別の関心を示している様子は見当たらない。使臣は日本の財力と豊かな物資に対する驚きをそのまま記すことはせず、至る所での豪華なもてなしと立派な施設について述べて婉曲に表現することにとどめている。日本の豊かさの基盤である強い経済力の源とその産物に対しては意図的に無関心を装い、その富の裏面に隠された百姓の悲惨な生活を記録した。使臣がこのように日本の優れた面をことさら否定してみせるのは、ある面から見ると自然なひがみであろう。

通信使一行に日本側が多額の礼物を送り、朝鮮側がその扱いに苦慮するという場面は何度も繰り返された。1636年に通信使が訪日した際も、使節が江戸を発つ時、大量の食材が残り物となって余った。日本側はそれを銀子に換算して千両を超える銀貨を使臣に贈った。贈られた使臣の側はこの金を対馬島主が受け取るように勧めたが、対馬では幕府のとがめを受けることを恐れて承知しない。使臣はこれをどうすべきか数日間にもわたって考えあぐねた結果、浜名湖の糊口付近の「今切」という場所で河の中に捨てることにした。このようにすれば幕府の面目も立ち、使臣一行の体面も損なわれず、両者の間で奔走して苦勞する対馬の利益にもなる。三者がそれぞれに良しとすることが出来る外交的ジェスチャーであろう。

5. 結び

最後に、韓国国史編纂委員会編 高等学校『国史』教科書に記述されている通信使に関する内容を取り上げてみたい。

日本は朝鮮の先進文化を受け入れ、徳川幕府の将軍が変わるたびに、その権威を国際的に認められるための手段として朝鮮に使節の派遣を要請してきた。これに対し朝鮮では、1607年から1811年まで12回にわたって通信使という名前で使節を派遣した。通信使一行は少ないときは300余人、多いときには400～500人にもなり、日本では国賓として優遇された。日本は彼らを通して朝鮮の先進的な学問や技術を学ぼうとした。したがって、通信使は外交使節としてだけでなく、朝鮮の先進文化を日本に伝える役割も果たした。教科書にはこのように記述されている。

通信使が日本の儒学者、文人、画家、医者などとの交歓を通じ、文化交流使節として果たした役割は高く評価される。また、初代の平戸イギリス商館長リチャード・コックス(Richard Cooks)の1617年9月付の日記に「朝鮮使節は壮麗なる様子にて、到る処において王者の如く待遇せられた」の通り、「国賓」としてあつく遇されたのも事実である。

しかし、一般的にある国の国力を評価する際は、国富・国防・文化の程度を多様な観点から複眼で見るべきである。上に挙げた教科書の内容は、儒教文化というひとつの尺度ではかった両国関係を記述したに過ぎないと言わざるを得ない。

通信使が1607年から1811年まで200年余の間に持参した献上品の肝心な品目は始終一貫、高麗人参であった。これに対して、長崎オランダ商館長は江戸参府のたびごとに、当時の最新の技術や科学を反映した数々の珍奇な品物を取り揃えて献上した。その一例を挙げてみよう。徳川家光(在職1623～51)へのオランダ商館長の1638年の献上品には、ベルシア馬(1頭)、ラシャ類(26m)、絹織物(100m)、印度産綿織物(22m)、毛織物(6m)、ステンドグラス(20枚)、羽飾り(兜用)、シャンデリア、ジュウタン、地球儀といった品物が含まれていた⁽¹³⁾。家光はシャンデリアを大変気に入り、日光東照宮に飾った。彼は将軍在任中の一代で朝鮮使節を3度も迎えた人物である。高麗人参を恭しく3度も贈られた将軍はどのような感想を抱いたことだろう。

ちなみに17世紀初めの両国の国勢を一瞥してみよう。朝鮮時代の人口は建国当時550～750万人、壬辰倭乱以前の16世紀には1,000万人を突破し、19世紀頃は1700万人程度になっていたと推定される。特に漢城には世宗(在位1418～1450年)のときにすでに10万人以上が居住し、18世紀に入ると人口は20万人を超えた。当時の朝鮮の歳入総額は50万～70万石と推計されている。

他方、日本では人口の全国調査は1721年から始められ、約3,100万人と集計されていた。江戸の人口だけでも18世紀初めには100万人に達したという。1645年の日本の石高総量は2,313万石である。面積は7世紀の新羅統一以後、日本は朝鮮の1.6倍ほどである。

江戸時代の日本の自己認識は、国家体制の違いから自らを武威の国とみなし、朝鮮に対しては文弱の国と見下しながらも、その文化の高さにはそれなりの評価をしていたものと言えよう。一方、通信使らは日本の経済の発展や進んだ文物を見て内心で驚きはしたものの、華夷思想から脱却できないまま文化的優越感に浸り、日本をあるがままに観察して評価しようとはしなかった。

日本も朝鮮も、内心では互いに相手を見下しながらも、明治維新までは対等の外交を行っていた。1764年、第11回通信使の正使として訪日した趙オムは、朝鮮の対日本外交を司る東萊府使(1757～58)を務めた経歴の持ち主であった。彼は日本の風俗、法制、衣服、飲食などを見るに、禽獣になるのを免れることができようかと『海樞日記』で酷評している。だが、彼は日本の文物を貶める一方で、サツマイモを朝鮮に移入したり、水事、舟橋、臼、堤防工事などを観察して導入しようとするなど、日本を評価する前向きな姿勢を見せていたのは評価に値する。

しかし、朝鮮は1607年から1811年にいたるまで200年にわたって大規模使節団を日本へ派遣し、膨大な見聞録を著したにもかかわらず、日本から朝鮮に導入したのはわずかに水事の技術やサツマイモの栽培法などにとどまった。日本を単眼でしか見ることのなかった当然の結果であり、当時の朝鮮の限界であろう。

注

- (1) 具範鎮「キメラの帝国：清帝国の形成と支配構造」『文史哲』第4号
(ソウル大人文大学総窓会報) 2010年, 53~54頁
- (2) 高柳光寿外編『日本史辞典』第2版角川書店, 1995年, 120頁
片桐一男『江戸のオランダ人』中公新書1525, 2000年,
59頁によると1633年から1850年まで166回の江戸参府が行われていたのである。長崎のオランダ商館の館長をさしたカピタンの多くは在任一年で、再任や数年滞在もあり、1609~1856年の間、166代を数える。
- (3) 『平戸オランダ商館の日記』第3輯, 岩波書店, 1969年, 34~36頁
- (4) 大庭脩『江戸時代における唐船持渡書の研究』, 関西大学東西学術研究所
叢刊(1), 1967年, 227頁
- (5) 河宇鳳『朝鮮王朝時代の世界観と日本認識』, 明石書店, 2008年, 209~210頁
- (6) 柳成龍著, 朴鐘鴻訳『懲毖録』, 東洋文庫, 平凡社, 1987年, 20頁
- (7) 武光誠『日本を動かした外国人』, 青春出版社, 2009年, 43~44頁
- (8) 三宅英利『近世アジアの日本と朝鮮半島』, 朝日新聞社, 1993年, 65頁
- (9) 仲尾宏『朝鮮通信使をよみなおす』, 明石書店, 2006年, 39~40頁
- (10) 鄭章植『使行録に見る朝鮮通信使の日本観』, 明石書店, 2006年, 50
- (11) 小野武雄『江戸物価事典』, 展望社, 2009年, 451~452頁
- (12) 1643年1月と同年12月, 徳川家光はオランダ商館長の献上物に対しての返礼として2回とも銀200枚, 日本上衣20着を渡した。幕府高官らも返礼で銀を渡したことがある。
- (13) 『平戸オランダ商館の日記』第4輯, 岩波書店, 1980年, 85~86頁